



まこと館だより



Est.1912

発行：至誠学舎立川 編集：法人事務局

理事長閑話 埋め草 ㊦

～新生 法人経営の成果 障害福祉総合センター建設～

2021 年 4 月 1 日、私にとっても悲願であった法人全体で取り組む事業「至誠障害福祉総合センター」のオープンです。施設が建設されたこの地は戦前からの借地で、旧至誠老人ホーム（養護老人ホーム）の跡地でしたが永年地主さんと交渉を続け、新施設建設用地としてようやく手に入れる事が出来たのです。センター事業は 20 年ほど前にスタートした小規模授産施設に源を置く「ワークセンターまことくらぶ」が発展した総合的な多機能・複合型の施設です。この事業の背景には想像以上に大きな意味があります。

この敷地は、1951（昭和 26）年、至誠ホーム最初の施設として戦前の少年保護団体の少年寮を活用し定員 32 名で養老施設（生活保護施設）を開設した因縁の土地なのです。その後至誠ホームは隣地を購入しながら発展しましたが、借地に第 1 種社会事業を経営することは不適切だと東京都から厳しい指導を受けていました。経過はありましたが結果として 2003（平成 15）年養護老人ホームは廃止して行政の指導に従うことになりました。そして後継事業は場所を移し現在のケアハウススオミとグループホームに衣替えとなったのです。今回はその借地を全額金融機関からの借り入れで購入、新規施設建設としたのです。この返済は法人の運営資金から毎年 850 万円 30 年間で返済するという厳しい計画です。

第 2 の大きな意味は法人経営にかかわる事柄です。2016 年 3 月の社会福祉法の改正はそれまで事業本部制で事業を発展させてきた至誠学舎立川のガバナンスの不備を突き付けました。それまでの法人は事業本部がお互いに干渉する事無く、半独立的な経営で内部に三つの法人があるような形態で運営されていました。しかし今回の建設に関わる法人自己資金は、内部で合意し児童事業本部、保育事業本部の積立資金から調達しました。法人事業の企画・発展が、事業本部会計からの資金により出来たことで、これまで経営的に分断的であった法人運営が本来法人のあるべき姿を示すことが出来たのです。さて次の段階は人事の交流が課題です。

第 3 には「まことくらぶ」を中心とした障害福祉事業は規模が小さく経営的に常に赤字経営でしたが、今回 24 時間ケアの GH を含めた事業拡大で経営改善の道が開かれました。そして法人の運営方針である、総合化、多機能化、地域化が進みます。高齢事業用地内に建設された障害事業と高齢ケアとの連携、発達障害支援の児童福祉分野との包括的なケアを実現する基盤が出来ました。それが「我が事、丸ごと」の地域共生社会、そして利用者と社会の期待に応える社会福祉法人の活動です。当センターのメッセージは「幸せを求めて」です。

最後にひと言、これで私が理事長として 3 期 6 年、法人経営の課題解決に多少貢献出来たかと自負し納得することが出来ました。関係した皆様方に心からの感謝です。

理事長 橋本正明

事業本部長メッセージ

令和 3 年 3 月 24 日に落成式・内覧会をおこない、4 月 1 日に至誠障害福祉総合センターがオープンします。家具や設備備品も搬入されはじめ、ピカピカの新しい建物に「命」を吹き込むかのように、利用者や職員の声がわたりはじめました。関係する人すべての「幸せを求めて」、未来につながっていくことが期待されます。地域の皆さんにも愛され育まれる施設をめざしてすすんでまいります。

ここに至るには、担当してきた皆さんの並々ならぬ努力と協調、そして強い忍耐があったのことに理解しています。心休まらず眠れない日々をたくさん経てきたことと思います。皆様のご労苦に心よりの感謝を申し上げます。

かつて経営の神様と呼ばれた松下幸之助氏は、「(新しい世界を創造するときには) 大いなる生みの苦しみを経て、その志のためにじっと耐え忍ばなければならない時期がある・・・」と政経塾の門下生に説いたそうです。凡人の私としては、生みの苦しきも耐え忍ぶ時間もできるだけ少なくほどほどにお願いしたいところではありますが、志は常に磨いておきたいと思っています。

新しい仲間にも恵まれて、大きな動きを予感させられる令和 3 年度を、皆さんと力あわせて進んでまいりたいと思います。

児童事業本部長 石田芳朗

事業本部情報

児童事業本部

おかげさまで至誠障害福祉総合センターが開設しました。今から25年前、至誠学園の一人の卒園生の自立支援からまことクラブの活動が始まりました。不登校やひきこもりが注目され始めたころです。18歳で就職したものの仕事も生活も立ちゆかなくなり、頼れる家族を持たない人にとって学園は正に実家です。彼は学園で清掃アルバイトをしながら授産施設での実習もしましたが、彼にあった事業所が見つかりませんでした。そのころ他にもひきこもりでほぼ毎日支援が必要な卒園生がいました。アフターケア専任の配置はなく子どもたちの養護の合間を縫って卒園生の支援を行っていました。ひきこもった彼には、元担当の阿久津嘉代子さんを中心に住居探しや生保受給手続きも含めた訪問は、1年間に300回を超えていました。市や社協、市内の事業所に相談をしながら1997年、学園のなかで小規模授産事業がスタートし、翌年から社協の助成金も受けられるようになりました。2001年には小規模事業所が法定化され、主任として事業を担ってきた阿久津さんが施設長に就任し今日まで事業を継続、発展させてきました。一人の生き辛さに寄り添うことが多くの人たちの幸せをつくる場につながっています。

至誠障害福祉総合センター長 高橋久雄

保育事業本部

新型コロナウイルス感染症拡大予防で、令和2年度の行事は中止になったり参加人数（保護者）を制限したり、内容を変えたりしてきました。登園降園も保護者は園内には入らずに玄関での対応とさせていただいています。年度末の「成長を喜ぶ会」も0歳児と1歳児、年長児については発表会を開くことはできないので、動画を撮りCDにして各ご家庭に配布しました。それぞれのご家庭でお子様の姿をご覧になって成長した姿に喜ばれて、連絡帳にうれしい言葉を書いてくださいました。一人一人の成長の姿は違いますが、泣いていたお子様が泣くことなく笑顔を見せて保護者と別れてお部屋へと行くことが出来る様になり自分で身の回りのことをしながら、少しずつではありますが「自立」へと向かっていきます。そのお手伝いが出来ていることが本当に実感でき、今後の仕事への希望が沸き上がります。

年度末で卒園をしていくお子様たちとお別れをし、新年度でのお子様をお預かりしてまた新たに成長のお手伝いをしていきます。

(しせい太陽の子保育園 廣瀬優子)

高齢事業本部至誠ホーム

至誠ホームミンナの園庭にある一本桜のつぼみが膨み始め、間もなく開花を迎えます。昨今の今頃は、国内の新型コロナウイルス感染が拡大傾向にあり、施設入居者の外出活動自粛やご家族の面会制限等が強化され、重苦しい雰囲気でも新年度を迎える準備をしていました。それでも「年内には収束し、普段通りの生活が戻ってくるだろう」という期待感もあったことを思い出します。ところが、一年が経過した今もなお感染収束の兆しは見え、お年寄りやご家族、職員の生活には様々な制限が続いています。この間、ミンナ全体で感染予防対策の周知徹底を図ってきましたが、グループホームと小規模多機能ホームで職員の感染者が発生しました。その都度何とか乗り越えては来ましたが、その怖さはもちろん、感染がもたらす多岐にわたる影響、感染に対する職員の意思統一や意識向上の難しさを痛感しました。苦しいのは事実ですが、ミンナにも私自身にも大変貴重な経験となっています。一本桜の開花と新年度を迎えるにあたり、気持ちを新たに我慢の時を乗り越えようと、ミンナー丸となって準備を進めています。

(至誠ホームミンナ 園長 諏訪 逸)

本部事務局だより

「夢なき者に理想なし、理想なき者に計画なし、計画なき者に実行なし、実行なき者に成功なし。故に、夢なき者に成功なし。」幕末に松下村塾を開き、明治維新で活躍する多くの志士を育てた吉田松陰の言葉と言われている。4月に入職された方々も夢や理想持って自分自身の計画を立てている方もいらっしゃるだろう。夢や理想を持つことは人生をやりがいを持って生きていくうえで大切なことである。しかし、夢や理想を持ってそれを実現する計画を立てて実行する、と言葉でいうのは簡単だが、いざ実行して結果を残すのは簡単ではない。『痩せて可愛く綺麗になりたい』という夢や理想を実現するために「ダイエットに取組み体重を0kgにしよう」という目標を立てたとする。これを実現するために「1日の摂取カロリーと運動量を決める」のが計画である。ここまでは『決意』さえあれば誰でもできるが、問題はここからだ。計画を実行するには『覚悟』が必要である。「今日は絶対間食をしない」「今日は絶対10km走る」という覚悟の強さ、切迫感に似た強さが無ければ実のある実行は難しい。法人と各事業所でも次年度の計画と予算を立て3月の理事会で審議・決定している。果たしてその計画の実現に向けた「覚悟の強さ」はいかなるものか？

(法人事務局長 野島忠幸)

(編集後記) 寒さもだいぶほころび、コロナ感染の中でも春の満開の季節を迎えました。粛々と日常を進めるしかないこの頃ですが、暖かなくなるとどこかほっとしませんか？(雲)